

沼津市 若山 小 記念館

第10號

1993.3.1.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424



村井武宛書簡・大正十四年三月十一日

最近になって村井武宛の手紙の現物がしばしば市場に現れる。無論単なる偶然なんだろうが、この度も沼津牧水会では村井宛書簡を新たに一通入手した。さきのZ会寄贈の書簡を含めると既に三通を所蔵したことになる。

手紙の内容は、相手が延岡中学同級で建築技師の村井のことだから、文学や芸術についてのやりとりなどは全く無い。すべて住宅新築に関しての細かい打ち合わせの類である。作品研究の助けになるとは思えないが、牧水を理解する手がかりとしては貴重な資料の一つであろう。

すでに活字化されている村井宛書簡の数は、大正十四年に限っても二十数通に達している。それらは今後東京の古書店などに続々と登場する可能性は充分ある。

千本松原に隣接する約五百坪の桃島、坪二十円というのを十六円に値切って、総額七千二百九十六円で買い取ったのは大正十四年二月初めのことである。この書簡はいよいよ家を建てるべく設計段階に入ったときの初期の打ち合わせの連絡で、その文面の至るところに、新しい家作りに立ち向かう歌人のすさまじいまでの意気込みがうかがえる。

「小生の洋式書齋の廊下に面した方を、どうしたらいいだろう、二間のうち和式書齋から一間半を高窓にして(下を壁、上を目のこまかな紙障子にし(ガラス戸はよして)、残り三尺(つまり細君の室寄りの)を何か「気の利いた板のドア」にする、という様なことはどうだろう。和式の方への通路は当然襖、テーブルの前面と向って左とはガラス戸。(中略)細君室のタンス入と背中合わせの本棚の上と、それに隣ったも一つの本ダナの上は(先日、どうしようかと相談してやった)小襖の袋戸棚としたいとおもふ。」と言った風におそろしく面倒な意見具申をやっている。まさに玄人はだしとも言えるような綿密な指示である。

若山牧水といえども「旅の歌人」とか「たましいの漂泊者」などと呼ばれ、ある意味では浪漫的偶像的な存在であった。単なる旅行好きというのではない。流離遊行を一個性として、西行や芭蕉にも比肩される確固たる人気の歌人である。その牧水が定住のため心身を削って邸宅新築に没頭する、他人の目からは無謀とも見える過大な計画(土岐哀果などはそう書いている)を打ち立てて、みずから溺れていった過程については、理解に苦しむところが少なくない。「漂泊」と「定住」の二律背反は、この時期、牧水の内部ではどのように平衡を保っていたのか。いずれにしてもこの手紙には、牧水の資質や感性の一端が極めて素朴に表れており、読むほどに興味は深まっていくのである。

(上田 治史)

特別寄稿

若山牧水先生の思い出

櫻井 淑

今は亡き阿部 太さんは、牧水門の同期生である。多分その頃二人共学徒であった。そして二十才未満であった。或る日一人は牧水先生をお訪ねした。「歌」を見て頂くためであった。神妙にかしこまっていた二人であったことは、今にしてなつかしい思ひ出である。沼津市千本松原の「若山家」即「創作社」である。その時のことで、生涯忘るることない常に新鮮な思ひ出がある。

卓を囲んでのこと。先生は、二人に「目を閉じて、しづかに卓の上を指先きで撫でよ」と言われた。二人はなでた。「何か指先きに障るものはなかったか」と言われたあつたのである。ゴミの如きものである。そのゴミのない歌を、心がけよと言われた。

以来そのゴミがいかなるものであるかがわかるのには驚くほどの年月が、必要であった。或る時は分った様な気がして安心した。しかし分つてはいないと思ふと、不安であった。くり返へしをつづけるのである。多分これは生涯のことであると、今は思っている。

「幾山河こえさり行かば」の先生の余りにも有名な一首は、カールプッセの詩の、真似だとか、焼き直しだとか言はれてもいるが、私は、さうでないと思つている。中川一政描くところの山に向つての牧水先生の旅姿は実にそれを、画にして了つてゐる品の高いものである。

「はてなむ国ぞ」の一句にこめられた牧水先生の

悲痛とも思はるる凝視の想は、息をのんで追い求めるより外ないのではあるまいか。

先生は「水」をこのまれた。千本の家へ掘り抜き井戸を掘られた。運よく素晴らしい井戸水が湧いた。富士山の裾野の村や町には、その頃、たいていは掘り抜き井戸が掘り当てられた。水を池に引き、台所に引いて、ふんだんに「水」をたのしまれたのであつた。池を中心にしての庭づくりは、いかばかりか先生のお心を「水」に引きつけたことか思ひ余るのである。その「水」も「住居」も今は見るよしもなく、若山牧水旧居の跡の立て札が浜通りの道ばたに立てられて、心ある人人の目を引いている。

その頃は、今の浜通りはなかつた。若山家から砂路をふんで、お首さんの前を通つて、松林を通りぬけて、浜へおるのである。或る一時期、私は若山家の玄關脇きの一と部屋をあたへられて、利雄さんのお手伝ひをしたり、喜志子先生のお手伝ひをしたことがあつた。そんな時の浜でありお首さんの前の道の思ひ出である。

先生は、歩みながら振り向くことをされなかつた。黙つて、ついてゆくのである。

時には、野の草を摘んで名をたづねて下さつたのであつた。その草たちを先生は、決して捨てることなく持ち帰つて、挿されたのである。この様なことも、以来幾年月を経た今も、なつかしく貴いことに思はれて、永遠の師の面影として、生きていて下さるのである。今、私の部屋には、一葉の先生の写真がかかげられている。これは、恐らく生涯このまゝに見上げられ終ることと思ふ。それは御生家の坪谷のお家である。医業を営んで居られたお家で、二階建の大きい建物で、山の中程に建てられて、村を見

おろす位置にある構へである。三回ほど訪ねたことのある村の文化財として、宮崎県から大切にされて居る建物である。その建物をバックに立つて居らるる先生四十才位の時のものである。和服姿で、先生の洋服姿は、学生の時より外にはめつたにない様である。それも、いつも、ふだん着のままと言ひたい姿であつて、かへつて、親しみやすいのかもしれない。今、私は先生の倍程も長生きをして、共に勉強をしている歌よみ仲間、先生ののこされた「はるかなる道」を説きつづけているのである。まさに「幾山河こえさりゆかば」なのである。生まれ来て、よき師に、まみえしことの幸ひを、しみじみとかみしめるのである。

先生の側近に仕へて、生涯を終へられた、大悟法利雄さん亡きあと、生き残りの弟子の一人として、私に課せられた「一とすぢ道」は、牧水先生ののこされた、大自然と共に生きて歌ひつづけることにある。

自然も人生も一と時として止まることを知らぬので、追ひつき、追ひこして、果てしなき道をゆくしかなないのである。「後姿」と言ふ言葉がすぎた。「後姿」に責任を持ちたいのである。先生の「後姿」は「はてなむ国ぞ今日も旅ゆく」そのものであつた。在りし日のそのお姿を追ひつづける私。今日も亦、明日も。

櫻井 淑 へさくらい よし

歌人 島田市在住。歌誌「棟」主宰。明治三十三年生れの九十三才、若くして若山牧水に師事、今日に至る。

第三回「中学生短歌コンクール」入選作品(平成四年度)

特選 (十首・十人)

鳥となり空高く飛ぶを夢にみるこの腕にはえるイカロスの羽
片浜中 佐藤 真也

あと一分ここですてたらもう負けだチャンスがくる
片浜中 佐野 政文

まで歯をくいしばる
片浜中 川崎 梨奈

お化粧して大人の気分を味わえばやっぱりどこか無理してる
片浜中 綾部 奈々

亡き父におぶられ泳ぐ深い海あのあたたかさ決して忘れぬ
静浦中 稲木 千尋

すみきった鈴鹿の空にF1の音ひびきたり胸がたかなる
長井崎中 安井 麻恵

よるの海海路をてらしとう台がここだここだとよびかけている
長井崎中 楠 ちづる

秋風が花びらゆらし通るのにまだまだ夏と朝顔は咲く
長井崎中 久保田美穂

冷えた朝ふとんの外のかた足が寒さ感じた秋のはじまり
第二中 湯浅 佐智

寝ころべばやわらかな陽がさしこんでたたみのにおい風がはこんだ
第二中 渡辺 博子

海へ行く夏も終りに近づいておいてきぼりのむぎわらぼうし
第二中 渡辺 博子

扇風機つけるとすぐにやってきていい顔してるうちの犬たち
片浜中 後藤 淳子

夜空舞う無数の星を眺めればその輝きに心のまれる
片浜中 渡辺 幸弘

カチカチと時計の音が響く中明日はテストと頭悩ます
片浜中 大川亜沙美

広告の中じゃ秋物ちらついてそろそろ始まる夏物セール
片浜中 三宅 隆

雨の中ひとりぼっちでさむそうに雨をやむのをまつている鳥
片浜中 高野 晃典

自分だけとりのこされていようそんな気がしたテストの前夜
片浜中 杉山 幸陽

最終回負ける中でばくの番みんなのきたいせにかんじつつ
片浜中 金丸 徳正

緑濃き山の谷間にそびえ立つああ我母校海を見下ろす
静浦中 芹沢 清太

右腕がケガしなければ勝てたかもああ悔い残る最後の夏に
静浦中 渡辺 昌敬

何羽ものトンビが円をえがく時空が私の答えになあれ
静浦中 原川 一子

夏の海夕日が落ちるその時にポツリと一人海を見つめる
長井崎中 丹羽 美穂

歩く道かれ葉がたくさん落ちてきてあの日のことをふと思ひ出す
長井崎中 松下 純子

散歩道いわかげみたらかたつむりもうすぐつゆだと思つた日
長井崎中 石渡 紗智

夏の日をひっそりとくらす遠い人貴方にあえるのいつになるだろう
長井崎中 加藤 崇幸

よるになりむしのなくこえきこえるところおちつくきようこのごろよ
長井崎中 大村 純一

みかんの木小さな玉がなりはじめ今年もそろそろ忙しくなる
長井崎中 大川 恵美

夏が過ぎ観光客もいなくなりさびしくなった長井崎の海
長井崎中 初又 由美

朝おきて肌に伝わるその風は気持ちさわか秋の気配が
長井崎中 海瀬友里絵

かえりみちトラブルあるが無しんけいひたすらにげるわたしのころ
長井崎中 武 宏美

恭子ちゃんやつたねやつたねあの笑顔金のメダルにまさる輝き
今沢中 石井 充子

一の三いつも何でもビリばつか松かげ祭では絶対一番
第二中 鈴木 里香

ひまわりと太陽どちらが大きいかさそれより大きいみんなの笑顔
第二中 小泉 綾

首をたれゆらりとゆれるひまわりに西日まぶしく赤とんぼむれ
第二中 林 智香

千本の磯の浜辺に歩みでて打上げられし蟹つけたり
第二中 山田 高士

空高く大きな輪をかく赤とんぼ小枝の先で羽をやすめる
第二中 田中 瑞枝

夏終わり太陽浴びたひまわりも思い出となりまた種になる
第二中 橋本 保子

風がふき雲が太陽かくしたらああ涼しやと午後の鳥たち
第二中 奥村 桂以

店さきの野菜を見れば秋なのに連日続くこの暑さかな
第二中 田代 瑞枝

夏の日にジージーうるさいせみの声せみを追いかけて子供が走る
第二中 沼田 晃平

夏の虫明かりを求めて飛び立って夜の自販機使うに使えず
第二中 小林淳一郎

下じきで自分の顔をあおいでも残暑きびしい九月のはじめ
第二中 菅野 俊一

入選 (三十四首・三十四人)

母さんとささいなことではけんかして泣きながらみる夏の星空 第二中 芹沢 彩

さんま食べりんごもなしも食べてからやっと来た来た秋の涼しさ 第二中 望月理紗子
登校の道をいそげば海よりの風に乗りくるひぐらしの声 第二中 小松亜希子

選後評

コンクールへの参加者は三七六人だが、参加校は片浜・静浦・長井崎・第二・今沢の五校で、市内中学校の十六分の五の参加率はどうなのかと考えることがある。作品の傾向は、締切日によってやや左右され、九月中頃だと夏休みの作品が多くなり、九月末にすると秋の風物が歌われる。生活の中で捉えた心の揺らぎを素直に表現した等身大の作品が多く、読んでいて心地よいものがあった。反面僕万智さん以後のライトベースと呼ばれる作品群に近い作品があつてもと、ないものねだりをするような思いもあつた。

特選の作品の中では、イカロスの羽が印象深い。夢は歌にしにくいものだが、中学生にはもつともつと夢を持って貰いたいと思つた。亡き父と海・豊の匂いなども思いが素直に表現されていて心を打たれた。また鈴鹿のF1はまさに中学生らしくて楽しい。入選の作品の中では、テスト前の不安感を歌つた杉山君、最終回に打席に立つた金丸君、トラブルを避けながらその姿勢を自ら批判する武さんなどの作品が印象に残つた。虫が光を求めて集まり自動販売機が使えないと言う小林君の作品のリアリテイも納得させられて、楽しく選をさせて頂いた。

(須永 秀生)



寄贈図書紹介

「若山牧水 全国歌碑集」 宮崎県東郷町出版

歌碑は全国処処に見受けられますが、とりわけ若山牧水と石川啄木の歌碑は多く、現在牧水歌碑は全国で一五七基、啄木は一〇五基を数えます。旅に人生の三分の一を費やした牧水によって詠まれた歌が各地に歌碑として刻まれております。

牧水生誕の地宮崎県東郷町では、平成四年十一月十一、十二日と牧水歌碑所在地の市町村関係者を招いて、牧水サミットを挙りました。

その際、東郷町がサミットの記念事業として出版したのが、右の「若山牧水全国歌碑集」です。これまでに、牧水の高弟大悟法利雄著「牧水歌碑めぐり」がB6判で出版されていますが、この歌碑集は、A4判と大判であり、歌碑ごとに一頁ずつさき、写真も碑の所在する市町村の協力を得て鮮明なカラー刷で、碑に因んだ解説もなされており、牧水歌碑の案内書としては絶好のものと思われれます。

牧水余話

牧水記念館に勤めて一年近くなると、牧水についてこれ迄全くの傍観者だった私にも、いろいろと牧水についての情報を仕事柄耳にするのである。それらを暇の折りふと記してみたいと思つた。

昭和三年九月、牧水は沼津の自宅で亡くなつたが、その年の牧水の動静を追ってみると、なぜかしら寂しさが募って感ぜられるのは私の気のせいばかりではないと思う。

一月 三島大社の初詣、二月 大中寺の梅見、三月 春浅き箱根山踏破とひきつづいての伊豆の旅、四月 妻子と長岡温泉、五月 静浦、内浦、西浦への徒歩旅行、六月 裾野五龍館、八月 下部温泉、と酒と疲労に蝕ばまれた心身を己に鞭打ち過したのではないかと思われてならないのである。そんな中で七月、清水市の清見鴻商業学校(現清水市立商業高校)から校歌作成の依頼を受けているのを知つた。清商は創立が大正十一年で、当初校歌がなく、昭和三年七月、第二代高島校長が泉の長谷川衛生課長の紹介で千本浜の牧水宅を訪れ、校歌作成を依頼し、牧水もこれを快諾し、その後、清水を訪れ想を練っていたが間もなく病を得、校歌作詞の約束を果せぬまゝ亡くなつてしまつたのである。清商は止むなく、その後、北原白秋、山田耕作に依頼し現在の校歌を手にしたのだが、牧水がいま少し永らえていたならば依頼に応え立派な校歌を完成し、サッカーの勝つたびに国立競技場で高らかに歌われるのを耳にすることが出来たものと惜しまれてならないのである。

(佐野 利夫)